

現代ヴァナキュラーを視点に、 アジアの建築家達と共に見た沖縄建築

連健夫建築研究家代表

連 健 夫



昨年10月、アジアの建築家15人と共に沖縄の建築を見る機会を持った。これは、AAスクールのOBを中心とするAAアジアという建築家グループにおける活動プログラムにおいて、今年は私が担当となり、JIAの大会に合わせて、大阪、福岡、熊本、沖縄という建築視察ツアーを組む形で実現した。彼らはシンガポール、香港、上海からの建築家であるが、そのフィールドはアジアのみならず英国、米国、オーストラリアなど広く、国際的で、彼らの反応は興味深い。シンガポールのウィリアム・リムは、現代ヴァナキュラー建築を推し進める著名な建築家である。近代主義によって、アジアの多くの都市がその特徴を失っていることを危惧し、ヴァナキュラー（地域性・土着性）を現代に活かすことの大切さを説き、設計活動や著書、執筆、ワークショップなど多彩で影響的な活動を行っている。せっかくのチャンスかと思ひ、JIAの沖縄大会のプログラム

で「ヴァナキュラーからの現代化」というシンポジウムを組んでいただいた。パネラーとして、アジアの建築家からウィリアム・リムとチェン・チャオ・ピン、沖縄の建築家からは国建の国場幸房氏と琉信の中本清氏を招き、コーディネーターは私が務めた。最初に中本氏からは沖縄の歴史についてヴァナキュラーを視点に分かりやすい発表があり、今回初めて訪問したアジアの建築家にとっては何よりの情報であった。次に国場氏から、自身の作品を通して、沖縄の気候、自然をどのように盛り込んだかというデザインについての発表があった。ウィリアム・リムは、チャールズ・コレアの作品などの事例をあげて現代ヴァナキュラーの考え方を発表し、チェン・チャオ・ピンは、建築教育の視点からヴァナキュラーの読み取りの手法について発表があった。ディスカッションは、沖縄のヴァナキュラー性と近代建築との関係、上海における開発の早さにおける

問題点などが話題となった。興味深かったのは、ウィリアム・リムが指摘したことで、「ヴァナキュラーにおいて、気候や材料は比較的すぐに取り上げられるエレメントであるが、それは必要条件ではなく、むしろ文化を読み取る意識が大切である」というコメントであった。すなわち、コンテクスト（文脈）を読み取るプロセスの中での創造的なジャンプをすることが現代ヴァナキュラーデザインであり、古いものを懐かしむノスタルジーとは異なり、これからの文化を創造する行為とこのことである。

さて、このシンポジウムの後の2日間は、沖縄の建築視察を行ったが、幸いにも沖縄建築士会の塩真孝彰氏と仲村健氏のご協力を得て、効率的に回ることができた。1日目に万国津梁館、名護市庁舎、今帰仁公民館、海洋記念公園、恩納村庁舎、中村家住宅、浦添市美術館を、2日目は首里城、城西小学校、国際通りの建築というコースで



ウィリアム・リム氏と



名護市庁舎にて



今帰仁公民館

回った。この中で、彼らが最も感嘆し反応したのは、名護市庁舎であった。沖縄のヴァナキュラーを現代化しているという意味では、明快で力強い作品であり、特に沖縄の強い日差しを避けるべく、外部と内部の中間的な空間が巧みで有機的にデザインされている点を指摘していた。また、沖縄の集落からヒントを得たデザインと、様々なところにあるシーサーに感激していた。今帰仁公民館については、屋根の上の豊富な緑を見られると期待していたにもかかわらず、部屋の中に日差しが入らなくなったとの理由から利用者の手によって、刈り取られており、ランドスケープアーキテクトのフランクリン・ポーはとても落胆していた。首里城は、その歴史的意味合いからも中国の建築家達にとって興味深く、沖縄の文化や中国との関係について、多くの質問があった。城西小学校について、強く興味を示したのは英国で教育を受けた上海の

建築家ラン・フォン・チャイである。個別指導など多様な学習形態に対応するオープンな空間構成は、英国の学校建築に通じるものがある。更に沖縄の民家の特徴である朱色の瓦を用いた方形屋根のデザインエレメントは、ヴァナキュラーの現代化を読み取ることができ、面白いと話していた。

彼らに共通している興味は、先進国のどこにでもあるような近代建築ではなく、古くて歴史・文化を感じさせるものか、ヴァナキュラーの特徴を読み取ることができる現代建築、あるいはメッセージ性の強い前衛建築なのである。機能を手がかりにした近代建築は、その普遍性に特徴があり、工業化と共に、多くの都市がその特徴を失う原因になった。シンガポールや香港、上海などは、その最たる都市であり、建築家としての設計活動の中で、自国の文化について、常に問い正されている深刻な問題なのである。これは、植民

地の経験を持つ彼らとしては、西洋文化の反駁、そして自国の文化を守るという意味でも大切なものである。文化をつくる建築家の態度として、また建築に意味を与えるという視点からもヴァナキュラーからの現代化は、今後の建築を考える上で、日本のみならずアジアにおいても、その重要性を増している。

プロフィール

連 健夫 (むらじ たけお)

1956年京都府生まれ、多摩美術大学卒業、東京都立大学大学院修了の後、ゼネコン設計部に10年間勤務、91年に渡英しAAスクールに留学、AA大学院優等学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師。在英日本大使館技術嘱託を経て、96年に帰国。(有)連健夫建築研究室を設立して設計活動の傍ら、明治大学、ルーテル学院大学で教鞭をとる。ヴァナキュラーをテーマにした海外ワークショップを続けている。作品にツリーハウス、すっぴんの家など、著書に「イギリス色の街」(技報堂出版)など。



中村家住宅にて



首里城にて